

第29回原子力委員会定例会議議事録

1. 日 時 2013年7月30日(火) 10:30～11:21
2. 場 所 中央合同庁舎1号館4階123会議室
3. 出席者 原子力委員会
近藤委員長、鈴木委員長代理、秋庭委員
東京大学教授
上坂充氏
独立行政法人日本原子力研究開発機構原子力人材育成センター長
村上博幸氏
内閣府
板倉参事官
4. 議 題
 - (1) joint Japan-IAEA原子力エネルギーマネジメントスクールの開催報告について
 - (2) その他
5. 配付資料
 - (1) Joint Japan-IAEA原子力エネルギーマネジメントスクールの開催報告
 - (2) 第21回原子力委員会定例会議議事録
 - (3) 第22回原子力委員会臨時会議議事録

6. 審議事項

(近藤委員長) おはようございます。第29回の原子力委員会定例会議を開催します。

きょうの議題は、1つが、「Joint Japan-IAEA 原子力エネルギーマネジメントスクールの開催報告について」、2つがその他ということですが、よろしゅうございますか。

最初の議題は、東京大学の上坂教授、それから独立行政法人日本原子力研究開発機構の人材育成センター長の村上センター長、御両者にお越しいただいておりますので適宜御説明いただいて、その後、意見交換させていただくということにしたいと思います。よろしくお願ひします。

どうぞ。

(上坂氏) それでは、東京大学原子力専攻上坂でございます。

Joint Japan-IAEA 原子力エネルギーマネジメントスクールの開催報告をさせていただきますと思います。

これはホスト機関といたしまして平成22年度から設立されました原子力人材育成ネットワーク、日本原子力研究開発機構、東京大学原子力専攻・原子力国際専攻、日本原子力産業協会で行ったスクールについてでございます。

次のページをごらんになっていただきまして、概要の説明でございまして、この原子力エネルギーマネジメントスクールと申しますのは、知識のみならずマネジメントに関するグローバルな視野を、若い方々に伝承するための研修コースでございまして、類似と申しますか、そちらのほうが早く始まっているんですけれども、イギリス、オックスフォードで毎年開催されている世界原子力大学夏期学校がございます。

目的は、各国のリーダーとなることが期待されている人材に、原子力に関連する幅広い課題について学ぶ機会を与えるということで、参加者は各国の政策・規制組織の担当者、プロジェクト企画・管理担当者、技術・研究者などでございます。ということで、マネジメントスクールと称しておりますので、技術だけではなくて政策やマネジメントの教育も行うことが特徴でございます。

経緯でございますが、こちらはイタリアのトリエステで平成10年から開催されてこまで3回、今年の夏も開催されるこれがIAEA版でございまして、これが行われていると、一方、2012年からアフリカ地区ということでアラブ首長国連邦、アブダビで1回行われました。それから昨年日本で5月、アジア版が行われました。また、今年アメリカでテキサスA&M大学でアメリカ版が実施され、日本でアジア版の2回目が実施されたということでございます。

講義の内容でございますけれども、すぐに原子力から入るのではなくて環境問題から入り、エネルギー戦略、核不拡散、国際法、経済、人材育成などを含んだ広範なテーマとなっております。また、講義のみならずグループプロジェクト、テーマの討論、討論の結果の発表

たということでございます。この人材育成ネットワークを活用して、この運営を行いました。

次のページでございまして、このページが具体的な運営の組織を示してございます。まず運営委員会というのが上位組織としてございまして、その下に企画ワーキンググループというのがございます。その下に5つの分科会、初等中等教育、高等教育、実務段階の人材育成、それから国内人材の国際化、それから海外人材育成の分科会、5つが運営されておりました、括弧にその事務局の組織が書いてございます。

それで、この IAEA 原子力エネルギーマネジメントスクールは、半分は外国の方ということで海外人材育成分科会マターでもあり、また、半分は日本人で、外国の方と一緒に英語で教育を受けるということで国際化ということなので、国内人材の国際化分科会と共同で御支援を受けながらこの実行をいたしました。そのような組織の支援を受けましてこのネットワーク内に、原子力エネルギーマネジメントスクール実行委員会を設置いたしまして実行しているということございまして、私は昨年度からこの委員長を務めさせていただいております。

以上が、運営体制でございまして、次のページから今年のスクールの状況を報告いたします。前半は原子力政策の講義を中心として東京大学で行いました。後半は知識・技術をベースに東海村で、また、施設見学も行いながら実施いたしました。研修期間は2週間でございます。昨年は3週間であったんですが、研修生からいろいろ意見をいただきまして、重ならないようにバランスをとって全体をコンパクトにしていたということでございます。

それから講師の方々ですけれども、原子力委員会、電力、メーカーさん、研究機関から講師をお受けいたしまして、やはり昨年比べて日本が主体にやるということで日本人の講師の割合がふえて、また、講義の内容も日本オリジナルの割合がふえてまいりました。公開講義も1つ実施いたしました。

施設見学、これも特に海外の研修生の方から、実際の発電所や研究施設の研究を、核燃料取り扱い施設や、また、メーカーの工場が見られる非常に貴重な機会ということで、非常に評判のいい企画でございますが、日本原子力研究開発機構の研究施設、それから原子力発電所は日本原電の東海第二発電所、それからメーカーの工場等の見学は東芝、IHI、日立 GE、三菱原子燃料を行いました。

次のページをごらんになってください。これが研修内容の時間別の割合でございまして、一番上が、今年はやらなかったんですけれども、Nuclear English ということで IAEA から、原子力特有の技術英語の講習が昨年はあったんですが、今年は期間をコンパクトにするとい

うこともございまして行わなかったということがございます。それからグループワーク・実習、それからテクニカルツアー、あと原子力・放射線、人材育成、災害、安全・核セキュリティー、社会的受容性・コミュニケーション、核燃料サイクル、原子力発電所の導入プロジェクト、原子力政策と経済効果、こういう内訳になってございます。こういう棒グラフにしてしまいますと2週間というのが目立ってしまいますが、我々はこれをかなりコンパクトに質を落とさずにまとめていったつもりでございます。

昨年のスクールとの違いでございますが、6割を削減したといえますか、編集し直したということがございます。重複をなるべく避けるというような努力をいたしました。また、他国との比較なんでございますけれども、UAE、アブダビでやったものにはテクニカルツアーがなかったとか、それから Nuclear English を、今年は時間の関係で行わなかったということですが、大体アメリカ版と似ているということがこのグラフからわかってきます。

次のページをごらんになってください。研修生の内訳でございます。基本的にはこれは NIE のスクールということで、IAEA が公募して選定して、各国から基本的に1名選定しますが、例外もございます。それから日本側から一部学生をサポートして送っております。ベトナムの5名というのは、日本側からのサポートで来られているという方々でございます。年齢は大体30前後の方が多いですが、ややシニアの方もいらっしゃいました。

また、組織の内訳なんですけれども、電力3名、メーカー1名、研究所3名、大学2名、あと官公庁のこの8名が多いです。この方々はかなりが文科系出身の方々でございました。これは昨年もそういう状況でございまして、また、IAEA のこのスクール全体で言えることでございます。行政、政策を担う方々、企画を担う方々ということでこういう内訳になってございます。また、日本人の研修生ですけれども、それに呼応するようにほぼ同等の30代中心の電力、メーカー、研究機関の方々が含まれておりまして、東大も1名研究員がいたんですけれども。

それから下のスナップ写真なんですけれども、IAEA の物理化学部長の冒頭の御挨拶、それから東芝、IHI を見学いたしました、そこの現場での説明のスナップ写真でございます。

次のページでございます。講義ですが、今年は40%が IAEA 標準で60%が日本オリジナルということでございます。2年目ということですし、かなり日本主導でということが全体の運営の中で求められてきましたので、我々はこういう内訳にして日本主体でということを行いました。その結果、講師が日本人が当然多くなっておりまして、それも極力この IAEA のスクールのスタンダードに合わせて、さりながら特徴を出しながら講師は日本人というこ

とを、努めてプログラミングいたしました。また、IAEA の講師に関してはヤネフ顧問と、それから日本駐在のハート氏、それから御都合で来られない講師の方々にはビデオ講義を行っていただきました。

次のページでございまして、日本からの主な講師ですけれども、近藤原子力委員長が冒頭、原子力エネルギーの必要性、原子力政策の問題点について、また、納得するものまでつくり上げていく必要があることを強調された講義を行っていただきました。また、公開講義といたしまして放医研の明石真言先生に、福島での人体影響、それから放射線の従事者を含めた方々の正しい知識を持つことの重要性、緊急時を想定した事前の準備の必要性について御講義いただきました。また、IAEA 側からの強い要望で、発電所現場で安全管理を行っている責任者の方に是非ということがございましたので、今回は運営委員会のほうで協議させていただいて中部電力の伊原氏に来ていただきまして、この発電所での安全対策について詳細な考え方を説明していただきました。

次のページでございまして。講義のみならず重要なグループワークということで、今年もIAEA と協議して6個のテーマを設定いたしまして、これに研修生の方々を均等に、彼らの志望も考慮いたしまして、あるいは国のバランスもいろいろ考えまして配置させまして、この2週間はグループディスカッションを行ったということです。

このディスカッションをリードするメンターという方々がいます、特に World Nuclear University、オックスフォードで行われている、こちらはかなりチューターが充実してディスカッションリードを実施しているんですけれども、今回はかなり学生の自主性に任せようと、ここまでのスクールを見てもかなりそういう傾向が見えてきているので自主性をとということで、メンターという名前ではなくてチューターという形で、議論をアシストするという形で設けまして、ただ、これも30代よりもうちょっと上の35以上の方で、かつてこのスクール等に出席した御経験のある方に、今度は教える側に入っていただくということで19名、もちろんフル2週間滞在していただいたんじゃないんですけれども、数日ごとに日程表をつくりまして、また、分野も一樣になるようにしまして、チューターを設けて御指導補佐をいただきました。

次のページでございまして。テクニカルツアーでございまして。ここにお示したように東芝、IHI、それから東海地区の日本原子力研究開発機構、それから原電の東海第二、日立製作所工場、三菱原子燃料を見ていただきました。また、NSRR も見ていただきました。また、この中で東芝の岡村本部長に、メーカーの考え方というもの、事業戦略をお話しいただきま

した。これも先ほどの発電所の安全管理と並びまして IAEA からの強い要望で、講義をしていただきたいということに応えたものでございます。

次のページでございますが、こちらはパネル討論、修了式のスナップでございます、左上が、ちょうど日本の原子力プラントメーカーさんのパネル討論会での様子でございます、司会者と IAEA 側と、それから3社さんから代表の方が来られて、かなりポイントポイントを御説明いただいた後、それぞれのプラントの特徴等々を、非常に去年の経験を生かしましてシャープに議論できたかなというふうに考えております。

また、右と下が修了式でございます。サーティフィケートの授与があるんですけども、ややサプライズだったんですが、研修生の代表、ナイジェリアのモルディ・ウッチさんから感謝の言葉をいただきまして、非常に我々はうれしく思いました。また、最後、かなり厳しい内容なのでみんなかなり喜んでおりまして、その喜びが出ている修了式のスナップ写真でございます。

次のページでございます、アンケート、これは毎年とっているんですけども、このまとめでございます。御自身の専門外のこと、特に核セキュリティを挙げている方が多かったということで、学ぶ機会が役に立ったということと、やはり日本では福島は避けて通れませんので、こちらでの情報や知見というものが学べる機会であったと、それから2週間強ではありますけれども、多国間の同業者の方々のネットワークがくれたと、それからテクニカルツアーは非常に好評でございました。また、日本の研修生の方からは、新規導入国の事情を知る機会となったということでございます。

また、改善に関する提案なんですけれども、2週間は短いという御意見もありましたし、コンパクトにするために土日も研修のスケジュールを入れたんですけども、これも評判が悪かったということでございます。それからコンパクトにしてしまったので全体的に質疑の応答とか、それからディスカッションの時間が少なかったということが、反省点としてありますし、やはり講師の方がその場において迫力を持ってやっていただきたいということなので、極力講師の方は来ていただいて御講義いただくように、これからもプログラミングしていきたいと思っております。

また、福島は今回入れてございませんでしたが、強い要望がありますので今後考えていきたいと思っております。あと、カントリーレポートなんですけれども、去年は3週間で余裕がありましたので、自己紹介を含めてカントリーレポートもやったんですけども、これもなかったものでやりたかったという方がいらっしやいました。それからあと宿泊のこととかテクニカ

ルツアー、それからあとは、今の原子力発電とプラントのみならず将来の原子力、核融合を含めた、それから農業、医療応用などの原子力の応用技術の話——なかったわけではないんですけども——その講義をふやしてほしいという要望もございました。また、他の先進国の講義についてもということでもございました。

次のページでございます。こちらが今まとめました幾つかのポイントでの評価、5段階でのがございます。それをまとめた結果は先ほど説明したとおりでございます。

次のページで、これが最後のまとめでございますが、前年度と比べてカリキュラムを改善しまして講義内容のバランスに配慮したし、全体をコンパクトにまとめて2週間で行いました。日本のオリジナルの内容が増したと、公開講義も実施しました。しかしながら、IAEAスクールですので IAEA の国際標準に従って、日本のオリジナルの内容を講義したということもございます。

グループワークについては、かなり自主性に任せたにもかかわらず非常に積極的に議論してございまして、立派なプレゼンをしてございまして。

また、施設見学は非常に重要であるというふうに再認識しております。

また、日本人研修生にとって外国の方と2週間強ですけども、一緒に過ごし議論することは非常に重要でございまして、パネルディスカッションでも発電所の若い方が英語で質問していると、IAEAの方に、そういうことは今まで余り考えられなかったことが本当に見受けられまして、変わりつつあるなということ非常に実感した次第でございます。それから規制関係の方も参加がございましたが、もっと参加してございまして、発電所や電力メーカーの方、官庁の方もいらしたので、懇親会には出ていただいて交流していただきました。

そういうことで2週間ということ、絆の輪がまた広がったと、昨年も40名程度、今年も30名ということで、あっという間に80名ぐらいの世界の輪ができたかなということでもございます。我々も鋭意努力して運営いたしました。昨年に続き最低限の成果は出せたのではないかなというふうに考えております。今後何とか3度目も日本で行えるように、今 IAEA いろいろな議論、準備しているところでございます。

以上でございます。

(近藤委員長) あとちょっと補足していただければ。

(村上氏) 1つだけ、まとめのところ、下の黒丸の3つ目でございますけれども、規制関係と

ということで国外の研修生は多数おられたんですが、日本、我が国の参加者は電力、メーカー、原子力機構ということで、国の機関の方の参加が今回はなかったということは、ちょっと残念なところでした。

以上です。

(近藤委員長) そのあたり、2週間外出せよというのは今の時期は大変かもしれないですね。

両先生、ご説明ありがとうございました。それでは、意見交換に移させていただきます。

鈴木委員からどうぞ。

(鈴木委員長代理) どうも本当に御苦労さまでした。昨年も今年も参加させていただいて大変いい雰囲気で行われていると思います。事務局の方々の運営の御努力だと思いますけれども、本当に御苦労さまでした。

参加された方々からの評価も高いし、IAEA の評価も高いので、是非続けていただくのがいいと思いますが、今年の特徴で、まず時間をコンパクトにされたことでいい面と悪い面と両方あったということですね。確かに7ページの内訳を見ると圧縮された部分が結構あるので、中身がはっきり全部出ているわけじゃないので私にはわかりませんが、安全のところとか燃料サイクル、核不拡散のところなんかは、ちょっと時間が少なかったかなという気がしないでもない、それが1つと、次の8ページの参加者の内訳なんですけれども、私自身日本のエネルギー政策における原子力の役割の講義を受け持ったんですが、新興国の方々の興味と日本人の方々の興味と、先進国も多少アメリカの参加者も入っておられましたけれども、やっぱりいろいろ聞きたいことが違いますよね。その辺、全体を通じてだと思えるんですけれども、IAEA としては主に対象を新興国を考えておられるんですかね。日本としては日本人の国際化というのは大きなテーマだと思うんですけれども、その辺の目的の明確化というか、参加者の方々がどういう意識でおられるのかというのは、その辺の感覚はいかがでしたでしょうか。

(上坂氏) IAEA の人選のお国を見ておれば導入国ということ意識されていると、それとあと IAEA がトリエステでやっています。ただ、ヨーロッパでやっているとやはりサポートするわけですので、旅費等々のことでやっぱりヨーロッパが多くなっちゃうんですね。そうしますとアジアの方とかアメリカの方、アフリカの方と考えるとということで、リージョナルなところということでアフリカ版と、それからアジア版とアメリカ版ということなので、大体その地区の導入国か、その近くのリージョナルなところへ参加いただくという1つ考え方と、さはさりながらこれは国際スクールなので、ドメスティックというかローカルだけで

終わるべきではないので、やはりインターナショナルでということではリトアニアとかの方もいらしていただくというようなことで、そういうミクスチャーと、それとあと日本としてこの方が来てほしいというのがあるので、それは日本の我々の費用でサポートしているというそういう内訳になっているということがあります。

それと、各国の状況が全然違うのと段階が違うのと、それから所属している組織も企業であったり官庁であったりしますから視点も違いますので、そういう意味で知識だけじゃなくて管理的要素ということが必要なというふうに考えています。

(鈴木委員長代理) もともとは将来のリーダーということなので、中堅よりちょっと上のレベルの方を目指している、そういう方のエントリーはあまりないですね。

(上坂氏) そうですね。ですからシニアの方もいらして、さっきのナイジェリアの方が一番シニアだったと思うんですけども、ただ、将来そういう方々に、そういうお立場に育ていただく方を育てることなので余り年齢にはこだわってなく、いろいろなネットワークということを考えれば、なるべく年齢が近いほうがよろしいかなとも考えております。

それからあと、2週間ということが、棒グラフなんかにしちゃうとずっとやっていないような感じがしちゃうんですが、実は議論してまして、マネジメントとあるいは政策とか、それが何なのかということがありまして、それをしっかりと今後考えていく必要があるかなと、今回もちろん社会情勢とかそういうのはコミュニケーションがあるんですけども、もうちょっと絞って心理学のセッションをつくりまして、心理学の先生にいらしていただきました。文科系の先生ということで、そこのパネルディスカッションでメーカーの若い方が質問したんで非常に頼もしいと思ったんですけども、そういう心理学とか、それから来年度は、もし来年やらせていただくのであれば、法学の先生とか文科系の先生も入っていただいてマネジメントの部分、あるいはポリシーの部分をもうちょっと、ちょっと偏った物の言い方かもしれませんが、体系づけて整理して講義できるようなことを、今議論し出しているところでもあります。そこをやや上乘せして、少ない感がないぐらいの適正感で来年度を運営できていければなというふうに考えております。

(鈴木委員長代理) IAEA の基本的な主催ということなので、IAEA の趣旨というのが当然あると思うんですけども、そこと日本でやることの意義あるいは日本の目的というのか、そのうまく組み合わせというのが難しいかなと思うんですけども。実際に質疑応答を聞いていますと、日本人の参加者の質問と国際的なマネジメントのための質問と、必ずしもうまく合っていないじゃないかということがあったんですけども、その辺が趣旨として、来年も

しやられるとしたらどっちに重点を置くのかということのほうが、重要なのかなという気がちょっとしたんですけれども、その辺はいかがですか。

(上坂氏) ですのでまだ全体で日本側からマネジメントあるいはポリシーサイエンス的なところが、また IAEA がおっしゃることが、なかなかまだちょっと理解できないところと、あと IAEA もいろいろなつくりをやっていまして、これが一番管理マネジメント、ポリシーサイエンスの色彩が強いところで、主催者がそう言うんですけれども、一番上位に来るスクールであるというのであるんですが、そこも IAEA も議論しているところのようなので、そこを是非今後、次のカリキュラムを作成するに当たっては、一緒に IAEA と考えていいところを見つけていきたいなと思います。それが非常に重要でありますし、IAEA 側もそこら辺の日本の主体性を期待しているような感じがありました。

(鈴木委員長代理) 来年も是非よろしくお願いします。

(近藤委員長) それでは、秋庭委員。

(秋庭委員) 御説明ありがとうございました。大変すばらしい試みだと思いますが、主催する側は、本当に大変な御苦労があったと思います。

幾つかまとめのところを拝見させていただいて2つお話を伺いたいと思います。まとめの最後から2つ目のところで「世界的な友情と絆の輪が広がった」というところがありますが、これできっと寝食を2週間あるいは昨年は3週間だったそうですが、共にして学んだ人たちは、多分そのときはすごく絆が強くなると思うんですが、今後もそれをずっと続けていき、また日本の人材ネットワークと有機的に結びついていくために、何か仕掛けを考えていらっしゃるがありましたら教えていただきたいと思うのが1点です。

もう一点は、今も来年度の話が出ましたが、来年度で3度目になりますが、先ほどからお話を伺っていると来年度は、できれば文科系の先生を入れたいとかいろいろなことがあると思いますけれども、今後これを続けていくときに課題となるようなことがありましたら、あるいは発展形を、将来こんなことを描いているというようなことがありましたら教えていただきたいと思います。よろしくお願いします。

(上坂氏) 1番目の絆に関してなんですけれども、これを1回目始めたときから1回で終わらせたくないというのは考えて、御報告していたとおりでございますが、これはやっぱり IAEA スクールですし、IAEA の考え方もあって我々だけで決められることではないので、とにかくそれを実現するためには、とにかく運営をしっかりやって高い評価のスクールを積み重ねることがまず第一ということで、1回目、2回目をやりました。

その結果として、実はつい先日ビチコフエネルギー局長から日本の小澤大使に、お礼の手紙が着いたばかりで、その中にもちょっとあるんですが、やはり日本主体ということがうたわれておまして、そういうことで3回目もやれそうな雰囲気ということと、そうしますと定例にしていきたいなど、ワールド・ニュークレア・ユニバーシティー、あればアメリカ、オックスフォードと1対1対応のような形になるので、そういう形で定着させてやりたいということを現実を持って今議論しております。

そうしますと、先ほど1回目40名程度の30名程度といいますと、彼らがアルマナイになってくるんですよ。なので来年もやれそうだとすることが、会期中にもだんだんとIAEA との話でわかってきましたので、IAEA の方々と御相談して、IAEA ニュークレア・エナジー・マネジメント・スクール・アルマナイ・アソシエーションをつくろうということで参加者には、もう担当者を決めまして昨年の方と連絡をとるようにと、今年各6グループからリーダーを決めまして、アルマナイ・アソシエーションの幹事を決めさせまして、それとメンター、チューターがいるんですけれども、彼らはちょうど研修生よりもう5歳とか10歳ぐらい上の方で、こういうのを経験して更に実務の実力をつけた方ですのでそのメンターも去年は30名、今年も20名ということなんで、その方も入っていただくということで、それからワールド・ニュークレア・ユニバーシティーもアルマナイ・アソシエーションがありますので、あれともリンクさせるということで、その後既にいろいろメールが飛んで彼らの活動が始まっています、我々にもメールが来ます。

それで私は原子力学会の理事をやっているもので、この非常に優秀な元気のいい動きやグループを、原子力学会にも貢献してもらいたいなということで、原子力学会のコラボレーションタスクフォースというものを、学会外の方も含めて立ち上げようとしておまして、それにこのアルマナイ・アソシエーション、ワールド・ニュークレア・アルマナイ・アソシエーションに入っていて、国際活動も原子力学会とうまく連携するように、絆をもっと大きくしていきたいというように考えております。

それからあと3回目については、やはりIAEA もトリエステ版がありまして、アフリカ版がありまして、アメリカ版があつて、日本版があつて、このスクール全てを詳細にマネジメントしていくことはなかなか大変だということで、トリエステのところはIAEA 中心でやっていくでしょうけれども、リージョナルなところは、そこの運営母体が主体となってやっていくフェーズに行かないと持続的ではないかなと思うんです。ですのでそういうこともあるので、3回目は日本側のほうが主体で運営するような形をやってみようということ、

IAEA と議論していきまして、そういう形で来年度はやっていく方針です。そうしますと、かなり IAEA 側の人的な作業が少なく運営できていくのではないかなと期待しております。

また、日本人の参加者もふえていただきたいし、また、学生さんも参加していただきたいと、そうしますとこの3週間程度のコースを、インターンのような形で、あるいは課外研修とかいう形で各大学院で単位化するとか、とにかく日本のカリキュラムの1つとしてこれが入っていけるようなとか。

(秋庭委員) ありがとうございます。すばらしい発展が期待できそうですが、そうなる有一番問題は予算のことだと思いますが、それは大丈夫ですか。

(上坂氏) それで、村上先生、いかがですか。

(村上氏) なかなかそちらのほうはうまくいきませんで、実際は今の規模でしたらば、何とか機構の運営費交付金の中でやっていけるかなというふうに思っておりますので、今後もその範囲では協力してやっていければというふうに思っております。

あとネットワーク全体で、手弁当で講義とかをいろいろ手伝っていただく部分もございしますので、そういった意味では運営については、今のところ今の規模であれば問題ないというふうに考えております。

(秋庭委員) ありがとうございます。

(近藤委員長) それでは私からすこし。いま、このアンケート結果を見て考えているんですけども、講義資料を事前に配付してくれという意見。私は全く正当な希望だと思うんですけども、紙じゃなくても電子ファイルでもいいのでなるべく十分事前に、特に今回のように Q&A のセッションが短いとかいうことであれば、なおさら事前に予習をしてきて適切なディスカッションができるようにすることはとても重要です。それに、これは講義の標準化につながる。IAEA のトリエステの催しに関してはテキストはほとんどアクセス可能ですよね。ですから受講生は十分事前に勉強できるし、また、世界中の人々がグローバルスタンダードがいまどうなっているか勉強するにも非常に便利です。ただちょっと IAEA のにおいが強過ぎて、何につけ、IAEA のガイドラインを使う事が大切というのが最後の結論、そこはちょっと面白みが思うんですけども、そういうことからしても、ここは、日本としての売りになるかもしれないので、工夫するべきと思います。

それからもう一つは、先ほどの鈴木委員の質問に関係することなんですが、私は、これはインターナショナルスクールだという認識でグローバルスタンダードを学習する場として講義、演習等がなされるべきと思っています。日本の事を学習するために IAEA が旅費を持つ

というのは説明がつかないことですからね。ですから日本オリジナルというのは意味がよくわからない。国際社会の原子力人材が身につけるべき知識であり、その能力を学ぶ機会であるということが大前提。そこで、日本の事例を使うのは国際社会の共通のノルムの理解を促進するためであって、日本のことを伝えるのが主目的ではないと思うんです。

まして、日本人の参加者が日本のことをここで勉強するなんていうのはほとんどひどい話であって、ここはインターナショナルノルムは何だということを勉強するところ、地理的に日本人は参加しやすいのでちょっと枠は多くしているということでしょう。IAEA のタイトルとお金を使って日本人が、日本人を教育しているということはあってはならないことです。

そういう点から、最後のコメントにあった先進国についての講義が欲しかったと、これもインターナショナルスクールなんですから全く正当な要求。フランスの実情とかアメリカの実情についてはフランス人なりアメリカ人を講師に来てもらって喋らせるということもあっていい。たしか、フランスの原子力学校の講義に日本人講師が寄与していた記憶があります。そういう国際相互乗り入れで、コンテンツの国際的なフレーバーを豊かにすることについても配慮されるべきだと思います。

それにしても、こういうものをマネージするのは大変なことで、マネジメントスクールといいながら、そのマネジメントで主催者が勉強しているという状況ではあるんだと思いますけれども、是非標準化できるところは標準化して、その上で一段高いところを目指してオリジナリティーを出していくのが大事だと思います。

それから IAEA のタイトルのもとでの取組みが3つとか限定されたものになるとすれば、近隣諸国への配慮も必要と思うんです。韓国、中国からの生徒や講師がいるべきということです。今回は韓国から参加した学生さんはいなかったのかな。

(上坂氏) そうなんです。昨年はいらしたんですが。

(近藤委員長) 私からは以上です。是非十分これらの点を議論していただいて、よりよいものにしていくようお願いします。来年はやっぱり40人いたほうがいいんじゃない。

(上坂氏) そうですね。もうちょっと。

(近藤委員長) 日本人を10人ぐらいにして、あと30人ぐらいは外国から集めたほうが良いと思いますけれども、宣伝をよくして。

(上坂氏) はい。本当にさっきもちょっと申しましたけれども、外国の方も元気ですけれども、日本の方が本当に電力、企業——官庁の方は来なかったんだけれども——機構さんとか大学

も、30前後で英語も頑張っているし非常に元気です。本当にあの方々を頼もしく思って、こういう方たちをまとめると何かできるかなという感じをやっていて感じました。先ほどのOB、OG会ですけれども、組織しましたけれども、彼らを何とかうまくまとまって活動できるように支援することが、非常に重要かなと思います。

(近藤委員長) それじゃ、きょうは御説明ありがとうございました。

これでこの議題は終わります。

それじゃ、その他議題、何かありますか。

(板倉参事官) 資料第2号としまして第21回原子力委員会の議事録を、資料第3号としまして第22回原子力委員会の議事録を配付しております。

それから次回第30回の原子力委員会につきましては、開催日時は8月6日火曜日、10時半から、場所は中央合同庁舎4号館の4階443会議室で開催いたします。

以上でございます。

(近藤委員長) じゃ、きょうは終わってよろしいですか。

きょうはこれで終わります。どうもありがとうございました。